

## 国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座 第2期活動実践報告とその考察

伊藤 駿 ・ 才士 真司

国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座は、2015年10月に公益財団法人福武教育文化振興財団と公益財団法人福武財団の寄付金により、岡山大学大学院教育学研究科に本学初の人文社会系初の寄付講座として、2015年10月1日から2018年3月末日での期限設置の契約が交わされた。本実践報告では、第1期の契約を延長し、活動の範囲を大きく広げた第2期（2018年4月～2021年3月）の活動について記述する。

Keywords：国吉康雄，アート，文化芸術資源，地域協働，美術鑑賞，展覧会

### 1. 国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座設置継続と目標の再設定について

#### (1) 寄付講座が成立した背景

国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座（以下、本講座）は、二度の設置延長を行い、現在に至る。よって本講座の活動期を、その設置契約の更新を行なった年度により3つに区分する。

2015年10月～2017年度の第1期（講座名称「国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究寄付講座」）。2018年度から2020年度の第2期（講座名称「国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座」に変更）。今年度から2023年度までの期限となる第3期である。

1期目の開始にあたり、本講座の寄付元と教育学研究科が取り交わした設置目的は以下の3つである。

- (ア) 地域の芸術・文化資源を活かした先進的な美術鑑賞手法の開発と実践教育を行う。
- (イ) 岡山の生んだ世界的画家である国吉康雄の作品及び画業と生き方を研究し顕彰する。
- (ウ) 地域のコミュニティと地域文化の創造的發展に寄与する人材を育成することによって、地域に貢献する。

これらの目的は、岡山市出身の洋画家、国吉康雄（1889-1953）<sup>1</sup>の作品とその資料群を世界有数の規模で保有する岡山県内の「国吉康雄コレクション」<sup>2</sup>を、地域の重要な文化芸術資源として位置づけ、国内外での研究活動と岡山県内での顕彰活動を推進するために設定された。この背景には、国吉康雄研究とその作品・資料の保管基盤の整備を行う必要があったことに加え、その達成には地域コミュニティの理解が欠かせないという認識を、本講座設置以前の、岡山での国吉康雄研究と顕彰活動から、本講座の設置に関わった機関、関係者<sup>3</sup>が認識していたことがある。この、「地域コミュニティからの理解」を得る活動は、「瀬戸内国際芸術祭2013」の公式プログラムとして企画された「国吉康雄展 ベネッセアートサイト直島の原点<sup>4</sup>」を機に様々な展開されてきた。この期間に実施された一連の国吉康雄顕彰活動<sup>5</sup>を踏まえ、国内外での研究連携の推進と、地域協働と学生参加による「国吉康雄コレクション」の多面的な運用を可能とするために設置されたのが本講座である。

模で保有する岡山県内の「国吉康雄コレクション」<sup>2</sup>を、地域の重要な文化芸術資源として位置づけ、国内外での研究活動と岡山県内での顕彰活動を推進するために設定された。この背景には、国吉康雄研究とその作品・資料の保管基盤の整備を行う必要があったことに加え、その達成には地域コミュニティの理解が欠かせないという認識を、本講座設置以前の、岡山での国吉康雄研究と顕彰活動から、本講座の設置に関わった機関、関係者<sup>3</sup>が認識していたことがある。この、「地域コミュニティからの理解」を得る活動は、「瀬戸内国際芸術祭2013」の公式プログラムとして企画された「国吉康雄展 ベネッセアートサイト直島の原点<sup>4</sup>」を機に様々な展開されてきた。この期間に実施された一連の国吉康雄顕彰活動<sup>5</sup>を踏まえ、国内外での研究連携の推進と、地域協働と学生参加による「国吉康雄コレクション」の多面的な運用を可能とするために設置されたのが本講座である。

#### (2) 第1期の活動概要

第1期の活動では、(1)で述べた設置目的と活動方針を踏まえ、岡山での国吉康雄コレクションの中核となる「福武コレクション<sup>6</sup>」への取材調査と、その活用によって本講座設置目的が実践可能であるかという検証作業がまず行われた。

研究領域では、本講座の設置直前に開催された、

---

岡山大学大学院教育学研究科 国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1  
Development of Yasuo Kuniyoshi Studies: Art Education and Rural Revitalization

A Report on the Second Period Activities and Its Considerations

Shun ITO and Shinji SAITO

Department of Yasuo Kuniyoshi Studies: Art Education and Rural Revitalization, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

スミソニアン・アメリカンアートミュージアムでの国吉康雄回顧展「The Artistic Journey of Yasuo Kuniyoshi<sup>7</sup>」を機に収集・取材された新資料の検証と「福武コレクション」に新しく収蔵された国吉のグワッシュ画《クラウン》(1948)<sup>8</sup>の修復<sup>9</sup>と調査を中心に行われた。顕彰活動では研究領域で得た成果の発信を、地域協働と教育連携による顕彰イベントとして行うため、この実施を担う機能を、本講座が企画する「展覧会活動」と、本講座が提供する「講義受講生の制作活動を基盤としたアートイベント」の実施という形で整えた。

「展覧会活動」では二つの系統を示した。ひとつは本講座が主催する「企画展覧会」であり、もうひとつは、前述した「福武コレクション」と、国吉康雄と関連する作家コレクションとの二人展の形式を採用した「合同展覧会」である。

企画展覧会では、美術観賞教育の現場における国吉作品の活用、アート作品の鑑賞を通じた観察力、批判的思考力、コミュニケーション能力の育成を目的とした「国吉型・対話探究モデル」(以下、国吉モデル)の開発のキッカケとなった「国吉康雄展 少女よ、お前の命のためにはしれ」<sup>10</sup>を、横浜そごう美術館と共同企画した。「国吉モデル」の概要に関しては後述するが、美術関係者、来場者から高い評価を得るとともに、横浜国立大学横浜国立大学教育人間科学部Art Educationゼミ、千葉大学の学芸員課程選択受講生、女子美術大学の芸術学講義と連携したギャラリーツアーやワークショップを美術館内で行った。また、横浜国立大学附属鎌倉小学校、桐蔭学園小学部「アートクラブ」に対して、美術鑑賞授業の「出前講座」を実施した。同様の取り組みは、合同展覧会の枠組みで、他地域の美術館との連携事業として、本講座から和歌山県立近代美術館に企画提案された「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎展」<sup>11</sup>でも和歌山大学との連携事業としても実施されるなど、その活動は県内外に及んでいる。

「講義受講生の制作活動を基盤としたアートイベント」は、参加型アートイベント「国吉祭<sup>12</sup>」として、本講座設置以来、毎年実施されている。この企画開発と制作・運営を担う学生に提供されたのが、現在も教養教育科目で続く、「クリエイティブディレクター養成(以降、CD養成)」である。CD養成は、地域に還元される形での「国吉康雄コレクション」の運用を実践し、地域との取り組み事態をブランディング化することを目的としている。この実践のために受講生が企画し、運営するのが「国吉祭」となる。

この「国吉祭」が本格的に運営されたのは、本講座が設置されて一年の節目となる2016年の「国吉祭2016」からだ。1922年に岡山城二之丸跡に建設された日本銀行岡山支店を再生した「ルネスホール」で、アートワークショップや本学部活動の紹介を中心としたイベントを実施した。

2017年は、岡山大学鹿田キャンパスの「Junko Fukutake Hall」で、創作音楽舞台劇「老いた道化の肖像をめぐるいくつかの懸念」をオリジナル台本と東京のプロキャストとクリエイターを招聘して実施した。

ルネスホール、Junko Fukutake Hallは共に、地域市民に文化サービスを提供するために作られた文化施設であり、建築物としても貴重な文化資源である。

ルネスホールは古代ギリシャ様式の意匠を大胆に取り込んだ大正期の貴重な建築物であり、「岡山県の文化振興に寄与する」という理念のもと、岡山県から指定管理者の指名を受けたNPO法人バンクオブアーツ岡山が運営と調査研究を進めている。国連直属のNGOであるWAFUNIF<sup>13</sup>の認定団体であるバンクオブアーツ岡山は、民間団体が文化事業開催時における企画開発援助とシードマネー資金の継続的支援を柱とする「ルネス方式」を提唱し、岡山県、岡山県備前県民局、公益社団法人岡山県文化連盟と協働で行なっている「文化が街にあるプロジェクト」で実践している。CD養成受講生と地域市民が協働する「国吉祭」も、現在に至るまで継続してこの支援を受けている<sup>14</sup>。

「Junko Fukutake Hall」は、本講座の寄付元である(公財)福武教育文化振興財団の第3代理事長であった福武純子により、「大学と地域を繋ぐ架け橋」となる文化施設として本学に寄贈された。本講座では、「Junko Fukutake Hall」を岡山大学発の文化発信・国吉研究のランドマークとして、国吉祭を初め、様々な文化イベントを行なっている。

「ルネスホール」とバンクオブアーツ岡山。そして本学と「Junko Fukutake Hall」が掲げる理念は、国吉祭を通して本講座が地域に提案する「市民のための文化的サービス」と合致するものであり、協働する団体、利用する施設が掲げる理念や背景を、「国吉祭」制作に必要な「物語(ナラティブ・デザインの要素)」として受講生と共有することは、本講座の重要な取り組みの一つであり、こうした理念・背景を元に国吉祭の開催地の選定や協働するパートナーとの対話を行なっている。

これらの取り組みは、「国吉祭2016」終了時には既に広く知られ、岡山市文化振興課から本講座に、「岡山市千日前に建設する芸術文化施設(現岡山芸

術創造劇場)」の学生活用に関する意識調査依頼があり、「岡山市立『新・芸術文化施設』における大学生の積極的な活用を促すための提案」をCD養成受講生と作成、提出した。岡山市とはこの成果実績を受け、(公財)岡山市スポーツ・文化振興財団から「国吉祭」での協働と、受講生と総括する機会を設ける事業提案がなされ、岡山市に「地域芸術文化資源の運用・コンテンツ開発による岡山クリエイティブセクターの活性化を図る拠点育成のための産官学・市民協働プロジェクトに関する事業実施報告と検証・成果に関するレポート」を作成し、提出した。

本講座を兼任で担当する赤木里香子教授(美術教育専攻課程)は、国吉祭に対する受講生の態度を、企画・制作・運営において「主体的である」と評価した上で、本講座がプロデュースする国吉祭の組成過程を、「授業外でも、受講生を中心とする活動を広く産官学民でサポートする体制を構築し、地域課題の検証を行うと同時に、「国吉祭」制作過程を通して受講生のコーディネート力やマネジメント力の育成に努めた」とした。

本講座では国吉祭以外でも、学外との人材の交流を積極的に行なってきた。

ニューヨーク近代美術館研究員で地域のアートプロジェクトを研究している山村みどり氏(現在はニューヨーク市立大学助教授を兼任)などの専門研究者や、官民から地域文化に造詣が深い識者や団体担当者を招き、受講生との対話の場を提供した。

2016年10月に、「Junko Fukutake Hall」実施した「日系アメリカ人アーティスト研究シンポジウム」では、国吉康雄研究講座のコーディネートにより、国内外から研究者やニューヨークを拠点に活動する美術家の千住博を招聘し、広く市民にも開放。本学院生には、カリフォルニア大学教授でアジア系アメリカ人アーティスト研究で知られるシープ・ワン氏への取材の機会を設けるなどのサポートを行い、同シンポジウムで岡山出身の日本画家、小園千浦(1885-1975)の研究発表の機会を設けた。

ここまで触れた様々な事業、講義は行政や岡山

県内に本社や支店を置く企業や地域団体との連携により行われ、多数のメディアで紹介され、岡山大学の地域協働プロジェクトの展開へ寄与した。

### (3) 本講座の延長

第1期の活動成果とその学内外の評価を踏まえ、2017年度下期には本講座の延長が協議される。この際、設置目的に(ウ)が追加され、変更が行われる。

- (ア) 岡山の生んだ世界的画家の国吉康雄の作品及び画業と生き方を研究し顕彰する。
- (イ) 地域の芸術・文化資源を活かした先進的な美術鑑賞手法の開発と実践教育を行う。
- (ウ) 岡山・瀬戸内地域の文化と芸術の多様性を研究し発信する。
- (エ) 地域のコミュニティと地域文化の創造的発展に寄与する研究成果の提供と人材を育成することによって、地域に貢献する。

設置目的が追加された理由は、本講座の活動実績が、既に岡山県内から県外へと拡張していたためである。本講座が研究と活動の基盤とする国吉康雄は、瀬戸内の複数の離島で展開される「ベネッセアートサイト直島」の「原点」と位置付けられている点にある。この詳細は、[才士2019]<sup>15</sup>に詳しい。また、国吉康雄に関わる展覧会を横浜市と和歌山市で実施し、第2期延長の協議を開始した時点で、栃木県立美術館(宇都宮市)での開催も決定していた。加えて、平成28年熊本地震で被害を受けた油彩画作品のレスキュー活動<sup>16</sup>に、IWAI絵画保存修復研究所代表で国吉作品の修復も手がける岩井希久子氏、筑波大学大学院世界遺産専攻保存科学研究室と共に本講座が参加し、この活動の継続も予定されていた。この詳細は、保存修復学会2020年熊本大会の岩井の報告に詳しい。合わせて、研究領域の概要には上記の目的の再提示に加え、本講座を兼任する赤木との共同研究を進めるため、「近現代の瀬戸内地域を中心とした美術教育の実践史の研究」が追加された。

本講座第2期目の活動では、岡山・瀬戸内地域の文化と芸術の多様性と現状を考察し、この成果を生かした教育プログラムと顕彰活動、その発信を広く行うこととなる。

この設置目的の変更に伴い、本講座の名称を、「国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究寄付講座」から、「国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生寄付講座」に変更した。

## 2. 第2期の実践

### (1) 研究活動

#### ① 国吉康雄に関する研究活動

第2期の国吉康雄に関する研究活動では、アメリ

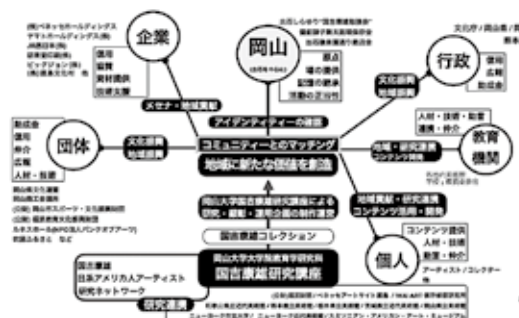


図1 国吉祭関連図

カ合衆国ニューヨーク州バード大学の美術史・視覚文化教授であるトム・ウルフ氏が発見した、国吉康雄が第二次世界大戦中の1941年のアメリカ中西部への旅行時に使用していた18cm×9cmのスケッチブックについて、ウルフの論考を参照し、「福武コレクション」収蔵の素描、リトグラフ、本画との比較を行なった。



写真1 スケッチブック

この成果は2019年に岡山シティミュージアムで実施した本講座企画展覧会「Mr.Ace X-O.Modern」展で実証展示した。この展覧会については後述するが、「福武コレクション」に新しく収蔵された《攻撃された芋虫》(1951)と、(公財)福武財団が購入した《疲れた道化》(1946)について調査し、同展で展示報告した。《攻撃された芋虫》は日本初公開となるカゼイン作品で、ネルソン・アトキンス美術館が所蔵する《私の運命はあなたの手の中》のシリーズである。《疲れた道化》は、1920年代に国吉が好んで描いたサーカスや道化師といったモチーフへの回帰を外形的には行なったように推論できる作品であるが、権利運動と軍国主義への反抗、祖国日本の敗戦を受けた国吉が仮面に込めた意味は複雑であり、一世を風靡した女性像に取って代わるモチーフである。本作を福武コレクションが所蔵する「仮面の道化」シリーズと比較することで、国吉が描く性別を超えた存在に迫ることも可能であろう。

また、岡山では、国吉が幼少期に日本画家の手解きを受けていたという証言の記述を岡山市史に発見。[才士2019]<sup>17</sup>と同展で報告した。

この「Mr.Ace X-O.Modern」展の制作準備期間で並行して行われたのが、旧国吉康雄美術館<sup>18</sup>のキュレーターであった小澤律子氏への聞き取りである。

この作業は2019年から3ヶ月おきに実施され、1960年代からスタートした国吉康雄に関するアメリカでの取材活動や、小澤が運営に携わった、(株)ベネッセコーポレーション(当時)社内に1990年～2003年まで設置されていた、国吉康雄美術館の展示方針などについてである。国吉康雄美術館の展示に関しては、「国吉康雄作品との対話を重視した

上で、アメリカの歴史を紹介する」など、現在の「国吉モデル」に通じるところが多いが、新型コロナウイルス対策と小澤の年齢を考慮し、現在は聞き取りを中断している。

また、国吉康雄美術館の顧問で小澤のパートナー、小澤善雄(故人)が収集した資料一式が本講座に寄贈されることとなった。

## (2) 国吉型・対話探究モデルの開発

「国吉モデル(国吉型・対話探究モデル)」は、本講座が提唱する鑑賞手法で、国吉作品など、社会へのメッセージを内包した作品の鑑賞体験を通して、近代史や社会課題への興味喚起を促し、様々な学問領域を横断する思考モデルでもある。

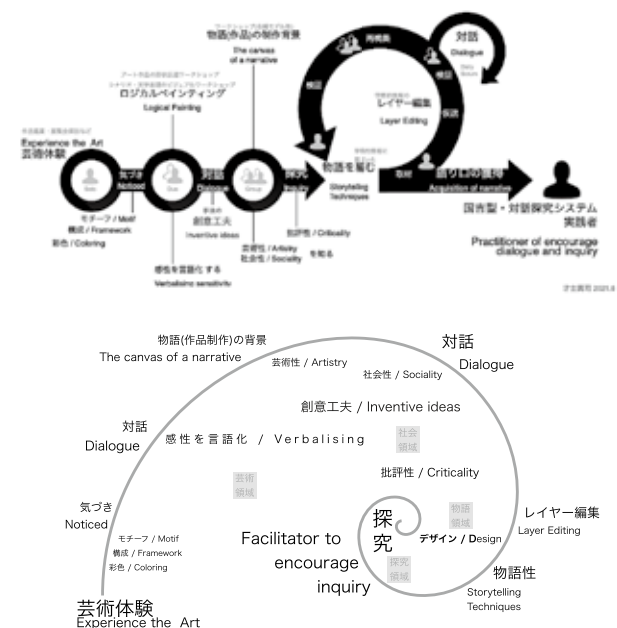


図2・3 国吉型・対話探究システム  
実践者育成過程とダイアグラム

図2は、「国吉モデル実践者」の育成過程を図式化したもので、国吉モデルを理解するための流れを示す。図3のマトリクスと合わせて使用するものである。国吉モデルでは、所謂VTS<sup>19</sup>などの鑑賞法が定める、「作品の情報は開示しない」の原則は適応せず、むしろ積極的に作品や作家に関わる情報や作家の生きた当時の社会情勢などを鑑賞者に提示する。但し、これが行われるのは「対話」の中で鑑賞者自身に「問い」が生まれたことが確認され、そこからさらに対話を重ねたタイミングでのことである。故に、鑑賞者の観察眼や取材力の練度によって対話の段階は違いを見せ、提示される情報も異なる。また、直接・間接を問わず、作品制作に影響を与えたことがなんらかの検証によって明らかである。もしくは推測される知見も鑑賞者に提供する場合もある。もちろん推論に関しては、その点に言及し、「仮



説」として提示する。

図のマトリクスが示すのは、作品を鑑賞する「芸術体験」に始まり、作品表現だけから得られる「気づき」を経て、それを「言語化」することから始める「他者との対話」の重要性である。他者との対話をより深化させるために鑑賞者は、作品観察から得た情報の共有を対話によって繰り返し試みる。国吉モデル実践者は、鑑賞者が知的欲求を探究心に変換させる芸術鑑賞体験を提供するように努め、得た気づきや情報を階層化し、物語性を持って編集する手助けを行う。鑑賞者は実践者や他の鑑賞者との対話を通して、自身の思考の軌跡をナラティブデザイン的に見直すことで、創造的で批評的な思考法を体験する。これがマトリクスで示す国吉モデルによる鑑賞体験の展開である。

本講座が国吉モデルの開発を行なったのは、国吉自身が作品について、その制作意図を明確にせず、説明を行っていなかったことによることが大きい。国吉は20世紀前半のアメリカアートシーンでのリーダーのひとりとして活躍し、特に「アーティスト」という職域におけるマイノリティーの権利運動を牽引した。また、第二次世界大戦中は軍国主義に反対する声明を出すなど、社会に積極的に関与した。こうした国吉の創作物に対する姿勢と社会活動家としての態度の違いは、作品が描かれた時代の事情が反映されており<sup>20</sup>、このことは、国吉作品の鑑賞者も同様に感じる傾向にある。だが、前述したように作品の説明を行わなかった国吉の態度は、作品解釈の間口を無限に拡張もする。このことは鑑賞体験を豊かにする可能性の根拠でもあるが、国吉作品の特性からレイシズム的発言や権威主義の肯定を誘引してしまう可能性もある<sup>21</sup>。こうした発言に際し、鑑賞をサポートするスタッフは、それぞれの鑑賞手法の主義や手法により、これらを受け入れる場合がある。国吉モデルの狙いも他の鑑賞手法と同様、「作品を通して、自分と他者の考えの違いを発見し、認め合う個人・社会の実現」を目指すことや、個々人の「クオリティ・オブ・ライフの達成」を含むものであるが、国吉作品の鑑賞体験から現出した差別を助長し、暴力を肯定する考えに対しては、それを「多様な意見」として受け入れるのではなく、明確にこれを否定しなければならない。このためには専門的な知識と実地経験を提供するプログラムが必要となる。

SDGs目標を掲げなければならないほどの閉塞感を抱える現在時の社会情勢を考えたとき、多様な社会課題の解決や構造的な問題に取り組む人材育成の必要性は切実なものとなっている。教育現場や企業が取り組む社会事業においても、文化の違いや地域

性、経済・社会的立場の違いを乗り越え、調整する能力を、社会と個人が身につけ、育むことは、SDGs課題解決のためにも喫緊の課題といえる。

#### ① 「国吉モデル」の出前講座

本講座で企画する国吉祭の会場や、展覧会会場となる美術館の所在地域を対象に、教育機関や福祉施設などで「国吉モデル」の出前講座を実施している。出前講座のプログラムは、参加者の学びの機会を最適化することを考え、開催場所、参加者の年齢や背景、実施時間を考慮した構成を、出前講座を行う施設スタッフと事前に確認し、作成している。例えば学校現場で実施する場合、アート作品を介した「社会課題」や「近現代史」への理解を深め、SDGs課題と関連付けることに重点をおく。このとき、学習段階に応じて、個々人の多様な創造性を確認する対話や仮説の設定、その検証を行う議論を促す効果を狙い、適切な情報を提供する。参加した生徒や教員からは、「入口としてアート作品を使う」ことで得られる、他の学習領域への誘導や関連付けの效果に驚く声がある。

老人ホームでの実践ではレクリエーション要素を増やし、記憶の喚起を促すため、国吉作品に限らず、地元風景を描いた作品や、岡山の他の郷土作家として竹下夢二(1884-1934)や児島虎次郎(1881-1929)の作品などを使用している。終了後のスタッフから、「参加者の今まで聞いたことのない話を聞いた」「参加者がとても楽しそうだった」という意見が寄せられている。

#### ② 国吉モデル実施事例

##### 小学校

- ▶ 岡山市立朝日小学校(2018年5月30日 3・4年生16名, 5・6年生20名)

##### 岡山県内高等学校

- ▶ 岡山県立瀬戸高等学校(2019年1月31日 美術選択者1年生8名)
- ▶ 井原市立井原高等学校(2020年9月18日 1年生28名)

##### 老人ホーム絵画鑑賞会

- ▶ ここち大元(2018年5月7日, 6月5日, 8月7日, 11月30日 延べ140名程度)

##### その他団体絵画鑑賞会

- ▶ 岡山自主夜間中学校(2020年10月11日 20名程度)

##### 展覧会と連動する出前講座

- ▶ 作新学院高等学校(2018年6月4日 情報科学部美術デザイン科1年生27名)



写真2 瀬戸高等学校での出前講座

### (3) カゼイン絵の具研究と体験ワークショップの実施

国吉が1940年代に好んで使用したカゼイン絵の具は、現在、一般的には使われておらず、国吉がどのようにカゼイン絵の具を使っていたかは、完成した作品と、わずかな文献資料によってしか知ることができない。そこで「福武コレクション」では、広島市立大学芸術学部との協働事業として、2013年と2014年に「国吉康雄・模写プロジェクト<sup>22</sup>」として、カゼイン絵の具を使った模写作品の制作を行っている。

模写プロジェクトで解明された技法を用い、2017年の和歌山県立近代美術館での国吉康雄・石垣栄太郎展の関連イベントとして、「カゼイン絵の具体験ワークショップ」を実施した。このワークショップは、本講座受講生が国吉の絵画・画材研究を目的に開発し、この塗料の特質である「速乾性」を利用したプログラムを考案したものである。この実施によりカゼイン絵の具に対する知見を蓄積し、継続した実践の場として、2018年度には瀬戸内市立美術館と宇城市不知火美術館でも開催した。2019年度は岡山シティミュージアムで、主催展覧会の関連イベントとしてカゼインワークショップを岡山大学教育学部美術専修の学生と、国吉康雄研究講座受講生が行った。他、2018年と2019年実施の「国吉祭」でも行った。

#### ① 実践内容

- (ア) カゼイン絵の具についての説明（顔料とカゼインバインダーを混ぜて作ること、他の画材との違い）
- (イ) カゼイン独特の技法の説明（重ねる、線を描く、拭き取る、かすれさせる）
- (ウ) 技法を試す
- (エ) 国吉作品の鑑賞（カゼインを用いた作品の技法観察）の後、作品を制作
- (オ) 国吉作品から《クラウン》および、その他のモチーフの線画を用意し、各自がその線画をなぞって組み合わせることで画面を構成でき

るようにした

#### (4) 和歌山県立近代美術館との共同研究

版画作品の充実したコレクションで知られる和歌山県立近代美術館と、国吉康雄初期エッチング作品に関する共同調査を、小澤律子の協力を得て開始した。

#### (5) 洋画家・清志初男研究

国立療養所長島愛生園歴史館の依頼により、洋画家、清志初男（1926-2020）の作品研究を開始。本人から従軍体験や油彩画を取り組む経緯についての証言を得るが、2020年8月の急逝の報を受け、12月に回顧展「碧と祈る 清志初男遺作展」を企画、実施した。この詳細は後述する。清志はスペイン芸術勲章を受賞するなど、海外では評価を受けていたが、国内では画壇から距離を置いたことやメディアを遠ざけていたなどの理由から評価が定まっていない。絵画に関する証言や記録が少なく、研究者もいないが、本講座は「国吉康雄研究・顕彰活動」の経験から、清志作品は「戦争と強制隔離」という近代の負の側面を知る絵画であり、作品とその画業を通して清志の思想性を知ることが、現在の「コロナの時代」に様々な社会課題の解決を目指し、新しい社会を模索する地域の市民にとって重要な情報であると考えた。

#### (6) 熊本地震・田中憲一プロジェクトへの参加

平成28年熊本地震では、文化財指定を受けていなかった地域の文化資源の多くが失われた。こうした「無名文化財」の保存に関するのが本プロジェクト。才士は共同研究者として参加。熊本で開催された保存修復学会で発表を行うなど、精力的に関与している。

### 3. 展覧会活動

第2期でも第1期に引き続き、「企画展覧会」と「合同展覧会」を開催した。但し、「企画展覧会」は、1-(2)で触れた「国吉モデル」の実践と検証のための企画展としての意味合いが鮮明になる。

#### ① 「国吉モデル」実践のための企画展

本講座では、社会への啓示的示唆に溢れる国吉作品による「企画展覧会」を、国吉モデルの運用を前提とした形で実施することで、国吉自身が直面した、現在時と直結する社会課題<sup>23</sup>を、現在時の私たちに改めて提示し、鑑賞者として作品や展示と向き合った市民が、自ら解決のための具体的な行動を模索することを促している。

「企画展覧会」では、国吉モデルの効果的な運用のために、掲示する年表を、国吉康雄の生涯年表を軸に、同時代の美術史と世界史の動向が、写真資料

と共に提示されるなど、鑑賞者が積極的に情報を採取、取材できるような仕掛けを施している。他にも、専門研究者や関係者の証言映像資料や、関わる関連イベントとして講演会やシンポジウムなどが開催され、鑑賞者の積極性を喚起し、国吉康雄の生きた時代へのアプローチを促す、作品との「対話」と自身の思索の「探究」を可能にする空間を創出している。次からそれぞれの展覧会の内容について報告する。

#### ① 国吉康雄展 ここはわたしの遊び場

会場：瀬戸内市立美術館/会期：2018年3月17日（土）～4月15日（日）/来館者数：902人

瀬戸内市立美術館での国吉康雄展の開催に際し、「国吉モデル」を提供する展示計画を作成した。計画の柱としたのは、幅広い年代に、「地域ゆかりの作家による芸術作品を鑑賞し、関係する知識を交えて思考する」体験を提供することで、岡山の多様な芸術文化に触れる機会とすることを目的とした。このため、会場を二つの区画に分けた。第一区画は、「国吉作品がどのような時代や状況で描かれたのか？」ということを中心とし、解説パネルや年表、関係資料で学べる空間とした。第二区画では、作品と最低限の作品情報だけで、余裕をもった空間演出を図り、鑑賞者個々人が国吉作品や同伴者と対話することを狙った。本展では、どちらの展示区画からの入室も可能という形を採用し、それぞれの区画を行き来することで、発見と学びの機会を堪能できるようにした。来場者からは、「知的好奇心を満たしてくれる博物館のような展示だ」や、「二つの異なる展示手法の鑑賞空間を作ることで、その行き来ができて楽しかった」などの意見が得られた。展覧会最終日に実施した「国吉モデル」によるギャラリートークには、約60名が参加した。

他の関連イベントとして、講演会、国吉康雄に関するドキュメンタリー作品の上映会（⑤－4映像作品）、アートワークショップを実施した。

#### ② Mr.Ace X-O.Modern

SETOUCHI ⇄ Y.Kuniyoshi ⇄ NEW YORK

会場：岡山シティミュージアム/会期：2019年4月20日（土）～5月19日（日）/来場者：2138名

「Mr.Ace X-O.Modern（ミスターエースクロスオーバーモダン）」展（以下、エース展）は、国吉康雄生誕130周年・岡山大学創立70周年記念特別展覧会として45の企業・団体の支援で開催され、本講座が2015年以来継続してきた国吉康雄研究と、国吉祭、展覧会企画などの顕彰活動の成果発信を目的として企画され、以下の（ア）～（オ）の目的を設定した。

（ア）「国吉モデル」の方法論を反映させた国吉康雄

と関係作家及び、アートプロジェクトの立体的展示

（イ）「国吉モデル」の効果の検証を行う展示空間の設計を行う

（ウ）学生が主体的に学ぶ機会としての展覧会制作

（エ）（ア）と連動したイベント

（オ）地域連携による社会的調査の実施



写真3 エース展会場風景

次にそれぞれについて説明する。

（ア）国吉モデルの方法論を反映させた国吉康雄と関係作家及び、アートプロジェクトの立体的展示

対話と情報の提供を積極的に行うことで、創造的思考法と批評精神の獲得を目指す「国吉モデル」の方法論を、展示計画自体に応用することを試みた。

まず、国吉康雄に関する情報を更新するため、国吉康雄が生きた時代や国吉自身と交流のあった周辺作家作品、国吉をコレクションの原点とする「ベネッセアートサイト直島」に関わる作品を合わせて展示することで、国吉康雄の画業とその影響を立体的に提示した。

前述した《画帳》の世界初公開や、日本初公開となった《攻撃された芋虫》、65年ぶりの公開となった《疲れた道化》を研究考察と共に展示すると共に、幼少期の国吉の画才を見出した日本画家、井上芦仙の作品も展示<sup>24</sup>。また、国吉が生きた時勢を知るため、瀬戸内市立美術館で作成した年表情報を更新し、国吉康雄の年譜、同時代の世界情勢、美術界の動向年表に合わせ、国吉康雄の発言を確認する映像作品をプロジェクターで投影した。国吉が誕生した1889（明治22）年と、国吉がただ一度の帰国を果たした1931（昭和6）年、1932（昭和7）年に関しては学際的展示演出を採用。1889年に関する展示区画では、パリ万博や大日本帝国憲法の発布などについて触れた。また、国吉康雄が帰国した1931年に関しては、満州事変や国立療養所長島愛生園の開園、竹久夢二の《立田姫》（1931）、五・一五事件（1932）に関連した犬養毅首相の紹介展示など、当時の日本の状況

を振り返る作品、資料を合わせて展示。特に1931年に設置された国立療養所長島愛生園で暮らした歌人、明石海人（1901-1939）の遺稿や、国吉と交流のあった画家・正宗得三郎（1883-1962）の描いた愛生園初代園長の肖像画を、長島愛生園歴史館の協力で公開。こうした展示手法を採用することで「国吉康雄が帰国した」という、美術史的トピックを当時の社会情勢という視点から考察する機会とした。

一方で、国吉に関しては文字解説を極力避け、生徒、友人、研究者の国吉に関する映像証言を各コーナーに設置した。展示に関する詳細な考察は、「解説ノート」を別途作成し配布することで、「国吉モデル」を一人でも体験できるように促した。

加えて、瀬戸内の離島、直島、豊島、犬島などで展開されるアートによる地域再生運動である「ベネッセアートサイト直島」が、「なぜ、国吉康雄を原点としているのか」という「問い」に応える展示区画を設置した。

国吉が「原点」とされる理由は、国吉康雄作品が内包する「メッセージ性」に触発された、福武コレクションのオーナーであり、「ベネッセアートサイト直島」の代表である福武總一郎が、国吉康雄作品のコレクションから、直島への「アート作品の設置」という着想に至った経緯によるものである。

そこで本講座では、国吉が対峙した近代化から続く戦後復興、高度経済成長に、瀬戸内が負った歴史を知る展示を行った。

ベネッセアートサイト直島の中心地である直島に関わる展示では、1952年に写真家・緑川洋一（1915-2001）が撮影した直島の精錬所の様子や、家プロジェクトと呼ばれる「自然とアートと建築の共生」を目標に行われているプロジェクトから、宮島達男の《角屋》のスケッチと共に、長く直島に展示されていたアレキサンダー・カルダー（1898-1976）の《赤い台のある大きな白い円盤》（1974）などを展示。カルダーは、国吉と共に第26回ヴェネツィア・ビエンナーレ・レベニス・ビエンナーレのアメリカ代表として参加している。

豊島（香川県土庄町）で1975年から現在にかけて続く産業廃棄物不法投棄事件「豊島事件」で不法投棄された産業廃棄物を高解像度撮影し、高さ4.5メートルの実物大タペストリーを作成し展示。わが国の近代化を支えた精錬所跡地に建設された犬島製錬所美術館の理念を紹介し、この構想を示した柳幸典（1959-）の作品を展示した。

こうしたベネッセアートサイト直島の運動の根幹には、近代化と戦後復興、高度経済成長期に徹底的に痛めつけられ、過疎化し、疲弊する瀬戸内の離島

の現代アートという文化資源により、本来の自然・歴史的資源に付加価値を与え、産業を生み出し、瀬戸内地域の復興を牽引しようという理念がある。エース展では、こうしたベネッセアートサイト直島が示す理念と、国吉が闘争した差別や権利獲得運動に焦点を当てることで、近代から現代に至るまでの様々な社会課題が連続した問題であることを広く発信した。

#### （イ）「国吉モデル」の効果検証

エース展の会期中、ギャラリーツアーを4月20日（土）、5月5日（日）、5月19日（日）の13:00～と18:00～の2回実施した。講師はそれぞれ、エース展企画者の才士真司とエース展作品担当の江原久美子であった。決まった日時以外にも、教員が引率する学校の公式行事として瀬戸高等学校に対しての鑑賞ツアーや、岡山自主夜間中学校と平成30年7月豪雨被災者に鑑賞体験ツアーを実施した。

また、エース展では会場内に企画者である才士をはじめ、本講座スタッフや、「国吉モデル」のトレーニングを受けた学生が常駐し、「国吉モデル」がどの時間帯でも実施できる体制を整えていたため、予約の有無に関わらず、希望する個人や岡山県立城東高等学校、岡山市立岡山後楽館中学校などの団体に対して「国吉モデル」を実施した。

#### （ウ）学生が主体的に学ぶ機会としての展覧会制作

エース展の企画と制作は、本講座の受講生の中から制作チームへの参加希望者を募った。自身の卒業論文や研究に活かすために、作品の解説パネルを担当した学生や、「展覧会が出来上がる仕組み」に興味があり、会場設営を担当した学生もいた。また、関連イベントとして、これまでの展覧会で実施していた工作ワークショップを毎週日曜日に、カゼインワークショップ（②-（3））を5月5日（日）に実施した。この運営も講座受講生が主体となり行った。

#### （エ）（ア）と連動したイベント

（ア）で触れたように、美術史以外の情報を積極的に取り入れる展示計画を導入したが、関連イベントでも表現や学問領域を横断させる試みを行った。国吉康雄の絵画ヘクロス・オーバーする声の創出～9244×35753～現代詩人のみごなごみ氏による詩の朗読会。国吉作品と対話を5月2日に会場内で実施。

音楽演奏会～ライブ演奏付きギャラリーツアー～5月3日にはドイツ国家演奏者資格を持つ岡山大学教育学研究科准教授の諸田大輔と指導した本学卒業生による、国吉の生きた近代の音楽史を辿る演奏会を実施。



他、以下の講演を実施した。

「ベネッセアートサイト直島の原点としての国吉康雄」(才士)

「岡山の近代美術と美術教育―国吉康雄が見たもの、学んだもの」(赤木)

「国吉康雄の帰郷」(江原)

「文化と災害」(本学教授松多信尚)

「絵画修復保存家 岩井希久子氏特別講演」

絵画保存修復家の岩井希久子が、岩井が実際に修復を行った国吉康雄作品やカルダー作品を前に、文化芸術資源の保存について考察。

「地域芸術文化資源の活用」(伊藤)

国吉康雄顕彰活動を例に。

(オ) 地域連携による社会的調査の実施

エース展はベネッセアートサイト直島との連携事業であり、この会期は「瀬戸内国際芸術祭2019」の春会期に合わせて設定された。これは、ベネッセアートサイト直島と瀬戸内国際芸術祭会場となる各島への来島者の岡山での動態調査の実施を前提としたものであった。土日祝日は、開館時間を20時までとし、直島にあるベネッセハウスと家プロジェクト、豊島の豊島横尾館、犬島の犬島精錬所美術館などに招待券を配布。併せて、西日本旅客鉄道株式会社の協力を得て、岡山駅へのポスター設置、車内中吊り広告(山陽本線、宇野線、瀬戸大橋線)無料設置などの協力を得た。また、JRグループホテルやこれまで開催した国吉際会場での招待券配布も行った。

この他、岡山トヨタ自動車株式会社、株式会社ビッグジョン、(公財)岡山市スポーツ・文化振興財団の支援を受け、「日曜は子どもと一緒に展覧会へプロジェクト」を実施した。これは、「美術館は親子では行きづらい」「一人で鑑賞を楽しむために託児所のような施設があると嬉しい」といった、これまでに本講座が企画、主催した展覧会に寄せられたアンケートの意見を反映したプロジェクトである。会期中の日曜日を「子どもを連れての来場」を条件に、同伴者2名の大人の入場を無料とし、工作ワーク

ショップを参加費無料で実施し、安心して子供を預けられるよう教育学部生を中心とした指導員を配置。子供を預けての美術鑑賞を可能とし、また会場内でのおしゃべりは、常時可能とした。

メディア露出

開催前はメディアの関心が薄く、初日を迎えた後、徐々にメディア取材が増えた。展覧会をイメージできなかったことが原因だと考える。山陽新聞社の関係者は「ネタの山だ。もっと早くくればよかった」と口にしていた。

新聞

4月17日 山陽新聞29面第一全県版

4月21日 読売新聞31面地域面

5月12日 山陽新聞13面文化面

5月17日 山陽新聞夕刊8面

テレビ

OHK 岡山放送

5月3日(金) 昼間のニュース

5月3日(金) 夕方のニュース

Oniビジョン

5月9日(木) Oniニュース

ラジオ

岡山シティエフエム

4月25日(木) 18:15～「夕刊ラジオ レディオオモモ」

5月7日(火) 10:15～「ステーションらんでぶ～」(FM山陰、岡山、香川、高知連動番組)

アンケート結果

来場者からの関心の高さ、理解度は高い。ベネッセアートサイト直島からの来場者など、国吉康雄を知っている「美術に関心がある」層のアプローチには成功したと考える。外部識者からの評価も高い。一部抜粋し掲載する。

榎木野衣 美術批評家「国吉はどんな掘っても次々に新しい発見がある。特に画帳は素晴らしい。この展示で国吉が後のアートに与えた影響がうかがえた」

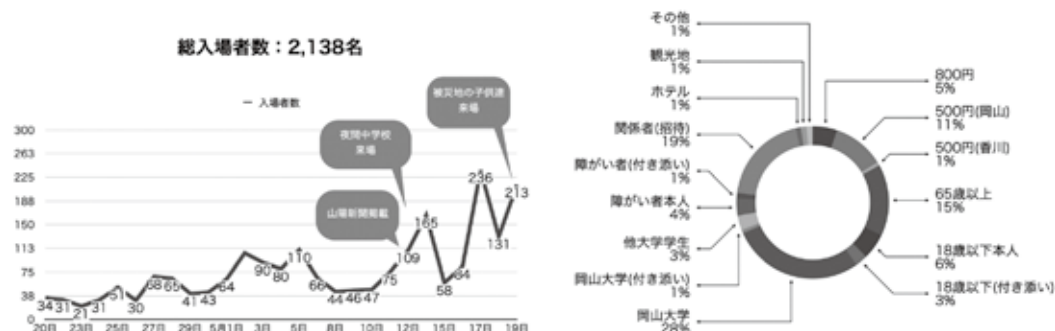


図4・5 エース展総入場者数・内訳

今津勝紀 本学社会文化科学研究科教授「僕らは考えつかない展示だ。見せるためにはセンスも必要だと分かった」

山本悦世 埋蔵文化財副センター長（当時）「面白い。大学だからこそだし、大学が行うべき展示手法だと思った。参考になった。決して元号を好んでいるわけではないのですが、それでも平成期の最後に、こうした展覧会に出会えたこと、私の中では意義深いものとなりました」

田村朋久 長島愛生園歴史館学芸員「こういう機会がなければ、出すことができなかった資料を展示して頂いた。ハンセン病の理解が進めばと思うし、歴史館の展示にも反映させていきたい。今後も協力してほしい」

天野静子 NHK日曜美術館プロデューサー「素晴らしい。瀬戸芸には行くが、国吉と直島のプロジェクトの繋がりを知らない人が多いが、国吉と直島の背景もよく分かった」

## 総括

来場者の満足度（面白かった29%、勉強になった26%）をみると、「国吉モデル」の方法論を採用した展示や関連イベントが示した美術にとどまらないダイナミズムのなかで提示した「新しい国吉像」及び、「新しい地域文化芸術資源の活用法」としての試みは成功したと考える。夜間中学校に通う60代の男性からは、「今、中学校で文字を書く練習をしている。（明治時代に使われていた教科書を見て）当時の教科書はとても、文字が綺麗。自分もまた頑張ろうと思った」という感想を寄せて頂いた。会場では、学生スタッフと話しこむ市民の姿も多く見受けられ、この対応にあたった学生は一様に「得難い経験をした」とコメントしている。こうした事例に象徴されるのは、学びや知的経験を求める市民が、地域由来の芸術作品や本学学生との交流の場として展覧会会場が機能していたということである。また、「国吉康雄を知っている人」だけではなく、「芸術に興味があり国吉康雄を知らない幅広い層にアプローチできたことも展覧会の成功に貢献したと考える。

## ② 合同展覧会

地域の美術館に収蔵されているコレクションの研究・展示・保存は、美術館と地域にとって重要な業務といえる。地域に所縁ある作家の生涯や時代、思想の変遷を、その作風で辿ることが、コレクションの収集と、その保全の動機であるが、こうした地域由来の作家の館藏品コレクションの展示では、代わり映えのしない内容から、正当な評価が受けにくいという状況がある。これは、岡山でも同じで、「国吉康雄展」を開催したとしても、「美術鑑賞を好む」

とされる一般市民の印象でさえ、「またか」という否定的なものになりがちである。

一方、地域の美術館が所有する、地域所縁の作家のコレクションには、充実した内容が多く、作家の生涯の軌跡を追うことが容易な質量を誇るコレクションも少なくない。こうした豊かなコレクションが生み出す才能や努力が結実していく様を目撃する驚きは、来場者の芸術への興味をさらに掻き立て、地域住民への文化的サービスの提供という観点や地域アイデンティティの普及面からも大いに推奨すべきことである。しかし、「地域に所縁ある作家」の展示企画は、すでにやり尽くされた感があり、展示の切り口を変えてみたところで来場者の満足度は低く、出足も鈍い。

そこで本講座は、各地域の美術館に、「比較する対象を持ち込む」ことで、地域のコレクションに対する視点の変化を生み出す、企画展示の実施を提案した。

2018年度は、栃木県立美術館所蔵の清水登之コレクションとの合同展覧会を皮切りに、熊本県立美術館での藤田嗣治（1886-1968）とエコール・ド・パリに関連するコレクション。宇城市不知火美術館での野田英夫コレクションとの展覧会を実現した。いずれも、国吉康雄と交流のあった画家の作品コレクションを有する美術館との連携事業として実施。これらの企画展示には、「出石国吉康雄勉強会」<sup>25</sup>メンバーや、本講座受講生が訪問し、地域住民との交流の場としても活用された。

どの会場の動員数もそれぞれの美術館の所蔵コレクションのみでの実施に比べ、堅調に推移し、熊本県立美術館では、会期16日目にして、2000人を動員した。これは、九州での本格的な国吉康雄の展示が初となったことや、大規模な回顧展が、東京と京都で行われたばかりの藤田嗣治への評価が重なった結果だといえる。

本講座が実施したアンケートでは、合同展覧会開催の効果は、清水登之（1887-1945）、藤田嗣治、エコール・ド・パリ及び、近代フランスの画家たち、野田英夫（1908-1938）に対する印象の変化に現れている。国吉作品との同時鑑賞と比較展示、国吉モデルによる解説やギャラリーツアーで、鑑賞者の従来の作品・作家評価に違った印象と多くの考察を来場者に提供していることがわかった。宇城市不知火美術館では、182人分のアンケートが回収され、その9割が企画を好意的に受け止めており、約半数が野田英夫作品を国吉康雄作品と比較したことで、「違った視点」で楽しめたと回答している。

こうした「合同展覧会」による展覧会企画の評価は、

地域の美術シーンの中でも高く、多くの学生、美術愛好家が来場している。

① 栃木県立美術館「国吉康雄と清水登之 ふたつの道」

会場：栃木県立美術館企画展示室

会期：2018年4月28日～6月17日

来館者数：4,945人

本展ではニューヨークで国吉康雄と同じ美術学校に学び、国吉の帰国時には、国吉を激賞する手紙を書いた清水登之の作品と、国吉作品を比較できるように展示構成がなされた。この展示構成の鍵となったのが、国吉、清水の戦争を巡る立場の違いである。アメリカに残り、日本の軍部を徹底して批判した国吉と、帰国し従軍画家として活躍した清水の人生と作品の比較は、戦争というものがいかに芸術家たちの心と創作活動に作用するかを、作品を通して検証することとなった。会期中に、美術批評家で、文化庁芸術選奨を受賞した榎本野衣氏を招いて、栃木県立美術館副館長の杉村浩哉学芸員と本講座の才士が鼎談「祖国・日本・敵国」<sup>26</sup>を行ない、展示会内容の分析を公開で行なった。この様子は榎本がインターネットのアートメディア<sup>27</sup>に公開している。ここで討議されたのは、国吉康雄作品の内包する現代社会に通じる「メッセージ性」についてであり、栃木県立美術館で取られた、国吉と同時期に活躍した画家との比較が行えることで、通常の画家単独での展示会よりも、時代と画家たちがどう向き合い、何を考え、制作を行っていたかを考えさせる、「良い機会」と評価をいただいた。

関連イベントとして実施した、トーク・ライブ「岡山のおじいちゃんおばあちゃんとクニヨシの話をしよう」では、出石国吉康雄勉強会の参加者と一般観覧者が作品鑑賞を行った。

② 熊本県立美術館と宇城市不知火美術館での地域連携展示

熊本県立美術館と宇城市不知火美術館での国吉康雄関連展示は、この両館の連携事業として企画された。熊本県立美術館には藤田嗣治に加え、野田英夫の作品も多く収蔵されている。一方で、野田の墓の近くに建つ宇城市不知火美術館には、熊本県立美術館の野田作品を借った場合、国吉康雄作品の展示スペースが不足するという事情があった。これを解決するため、才士の提案により、熊本県立美術館で藤田嗣治と国吉康雄を対比させる展示会の組成が決定した。

岡山からの絵画コレクションの展示が、地域の美術館の連携事業を生んだという稀有な例といえる。

②-1 宇城市不知火美術館「国吉康雄と野田英夫

越境者たちの夢」

会期：2019年1月4日～2月3日

来館者数：800人

熊本県の宇城市不知火美術館では、国吉に学んだ日系二世の画家、野田英夫の作品と国吉作品を対峙させ、渡米画家が作品に込めた思想性を紹介する展示企画となった。野田英夫は日本に帰国中に亡くなり、その墓が父親の郷里である宇城市にある。地域にとって野田英夫作品をその画業を俯瞰する展示会の開催は、これが初めてとなり、熊本県立美術館も野田作品の貸出と調査を積極的に行なった。また、本展は、合同展の形式でありながら、「国吉モデル」を促す形での展示構成を試みた。解説は展示区画に原則一枚の章解説だけにとどめ、作品ごとの解説は行わなかった。鑑賞者と作品との対話が生まれる環境づくりを行なった。結果、鑑賞者の滞在時間は、不知火美術館での平均値を超え、30分以上の人数が3割を超えた（会期中日曜日調査）。なかには、1時間以上の滞在者も見られた。

②-2 熊本県立美術館「西へ東へ 藤田嗣治と国吉康雄」

会場：熊本県立美術館2階第3展示室

会期：1月8日～3月24日

来館者数：3000人（会期中）

熊本県立美術館には、エコール・ド・パリを代表する画家、藤田嗣治が幼少期を熊本で過ごしたことに関連して、ピエール＝オーギュスト・ルノワール（1841-1919）やジュール・パスキン（1885-1930）など、充実した近代フランス絵画コレクションを所蔵している。国吉康雄はニューヨークでの画学生時代にルノワールを研究し、パリ留学中には、パスキンを介して藤田とも交流した。そこで本展では国吉の前半生の画業における近代フランス絵画の影響を指摘しながら、国吉を日本に紹介した藤田嗣治との関係性に触れた展示を行なった。

③ 国吉祭

① 国吉祭とは何か

国吉祭は講演会やシンポジウム、映像ドキュメンタリーといった国吉康雄に関する最新の研究知見を発信する場であり、国吉作品の展示、作品をアレンジする親子向けの工作ワークショップや、国吉が実際に用いた絵画技法を体験する描画ワークショップなども実施され、国吉作品の活用法を開発する場である。

この目的は、多様で幅広い年齢層の市民に、国吉康雄作品に親しむ機会を提供することであり、且つ地域の文化芸術資源としての国吉康雄の有効的な活用を広く訴え、その資源価値としての公共性を高め

ることで、国吉研究の推進と保存の意義を訴えることにある。

2018年以降の国吉祭では岡山県内を巡回する「CARAVAN型国吉祭」と岡山市内で開催する「コラボ型国吉祭」の2種類を展開している。

## ② CARAVAN型の国吉祭

### ②-1 国吉祭2018 CARAVAN in 吹屋

開催日：9月30日

会場：吹屋ふるさと村「長尾醤油蔵」

参加者：40名

国吉祭CARAVAN、高梁市「吹屋ふるさと村」から始まった。「吹屋ふるさと村」はベンガラで染められた瓦が特徴的な、1974年に文化庁から重要伝統的建造物群保存地区の認定を受けた岡山を代表する観光地でもある。

「出石国吉康雄勉強会」にも参加していた吹屋で活動する陶芸作家・田邊典子がコーディネーターとして参加し、CD養成受講生が田邊氏や地元住人への聞き取りや、吹屋の成り立ちなどを取材した。しかし、開催予定日に「平成30年7月豪雨災害」が発生。開催を9月29日（土）・30日（日）に延期した。本講座では有志を募り、高梁市において災害ボランティアを実施。8月11日（火）には、中野吹屋青年団の主催による「吹屋納涼祭」に受講生有志と参加し、アートワークショップを実施したが、延期した日程も台風が直撃。吹屋の関係者と協議の上、台風前の9月29日（土）に、プログラムを短縮し、講演会とアートワークショップ、国吉康雄の原寸大模写作品の展示のみ行った。

### ②-2 国吉祭2018 CARAVAN in 玉野

開催日：10月13日・14日

会場：玉野ショッピングモール メルカ

参加者：502人

開催地となった玉野市の宇野港は、瀬戸内海の島々へ渡る玄関口であり、宇野港周辺にも現代アートの作品が多数設置されている。しかし、「国吉祭2018 CARAVAN in 玉野」では、会場を玉野市市役所近くの、ショッピングモール「メルカ」となった。宇野港からも徒歩で15分程度の立地ではあるが、メルカは観光客のための施設ではなく、スーパーや飲食店、服飾店などが入る地域住民の日常を支えるための施設である。「国吉祭2018 CARAVAN in 玉野」が、瀬戸内国際芸術祭の玄関口である宇野駅や宇野港周辺を会場とせず、地域の生活基盤の中心であるモールでの開催を決定した理由は、国吉祭が「地域と文化・アートとの関係を考察する取り組み」の実践モデルであり、「地域住人にアートというものが、どう捉えられているか」を、本学の学生が、国

吉康雄コンテンツの運用を通して取材し、考察するためのイベントとして企画されるからだ。

会場となった「メルカ」には、ショッピングモールの他、中央公民館と市立図書館、市民ギャラリーが入る地域の文化活動の拠点施設という側面があり、地域住民の「暮らしと文化」の拠点施設での国吉祭は、①で触れた開催地の背景、物語性を求める会場選択と合致する。地域住民との積極的な交流を通して、地域とアート・文化との関わり方についての考察を深めるためには、宇野港周辺で行うよりもメルカで行うことの方がメリットが大きいと考えた。

「国吉祭2018 CARAVAN in 玉野」では、国吉康雄実寸大模写作品の展示を中心に、カゼインワークショップや、「お面作りワークショップ」と「額装ワークショップ」などのアートワークショップを行い、モールとして「メルカ」の建造物の特性を生かしたスタンプラリーなども実施した。また、瀬戸内国際芸術祭への参加プロジェクトとして、香川県の大島の国立療養所大島青松園ジオラマプロジェクトに使用する「松の木」のミニチュアを作成するワークショップを、瀬戸内国際芸術祭の運営団体である「こえび隊」が指導に参加して実施された。200本の松が完成し、青松園に関する資料展示も行われた。また、岡山大学教育学研究科の山本和史教授の指導による「紙トンボ制作ワークショップ」も行った。図書館では関連書籍による特設コーナーを展開し、本講座に所属する講師陣が中心となり、国吉康雄や直島、瀬戸内国際芸術祭に関する講演や、現代アートの作家を招いての対談も開催した。

2日間でも多くの子供たちで賑わい、これまでの「国吉祭」の中で、最も多くの子供達がワークショップに参加した。

### ②-3 国吉祭2019 CARAVAN in 鯉が窪

開催日：12月7日・8日 会場：きらめき広場哲西・鯉が窪道の駅文化伝習館 10:00～15:00

参加者：323名

新見市哲西町にある「鯉が窪」で国吉祭を実施した。当初、国吉との接点のない鯉が窪での開催には「無理がある」という意見もあった。しかし、受講生と共に鯉が窪地域への取材を行った結果、敢えて「国吉という他所の文化芸術資源」を持ち込むことで、「鯉が窪地域に伝わる、文化や風俗を再確認する」ことを目的とする企画をスタートさせた。鯉が窪には国の天然記念物に指定されている「鯉ヶ窪湿原」があり、鯉ヶ窪池には多くの鯉が飼育されている。哲西町では、この「鯉」を観光資源化しており、国吉祭の会場のひとつとなった「道の駅・鯉が窪」に



は「鯉」をモチーフとした商品や色鮮やかな「鯉のぼり」が展示されていた。また、新見市は神楽文化の継承に力を入れており、使用される「神楽面」はメイン会場となる「きらめき広場哲西」にも常設展示されている。

国吉は1940年代後半に作品のモチーフとして頻繁に描いている道化の「仮面」や、1931年に日本に帰国した際、岡山からアメリカに持ち帰ったとされる「鯉のぼり」を作品中に描いている。私たちは、この国吉が描いた「仮面」と「鯉のぼり」を、哲西町の地域資源の一つである、「神楽面」と「鯉」に関連づけることとした。

これまで通り、鯉が窪での国吉祭の企画も、CD養成受講生が担い、運営も行った。受講生は鯉が窪を定期的に訪ね、地域の伝統祭事である、「頭打ち」の取材を行うなど、国吉祭を企画、運営するための取材活動を重ねた。一方でこれまでに実施したアートワークショップを検証し、一度に多くの参加者が体験できるように改善している。

こうして実施されたイベントは、実寸大模写作品の展示をはじめ、5種類のワークショップ。併設される図書館の絵本を利用した演劇体験。「鯉のぼり」を参加者で作る「壁画制作プロジェクト」を実施。また、STEAM教育の手法を取り入れたワークショップも、石川彰彦教授（岡山大学教育学研究科有機化学研究室）に監修を依頼し、国吉作品の多彩な「色」をモチーフにした「クロマトグラフィーでSTEAM体験ワークショップ」と、稲田佳彦教授（岡山大学教育学研究科理科教育講座）と、河田哲典教授（岡山大学教育学研究科家政教育講座）に監修を依頼し、新見市が展開する米粉パンの制作施設を利用した「パン作りでSTEAM教育を体験しよう！」の2種類を実施した。

これらに加え、岡山大学院教育学研究科で社会学を専攻している大学院生が考案した国吉作品と国吉の経歴、社会活動を学び、参加者自身について考える教育ワークショップ「みんなで国吉作品の謎を解明せよ！」を実施。このワークショップはその後、民間の助成金を獲得。現在も活動を続けている。

講演会では才士が、「人間的で文化の溢れる地域共生社会の持続のために」という題で、本講座が取り組む岡山や熊本などでの事例紹介に、地域共生社会をいかに持続させるかについて報告した。

このように、多くのイベントを企画し、地域住民たちと交流した。親子三世代などでの来場も見られ、滞在時間も2時間以上の家族も多く、土日には公共交通機関が運行しない会場に人が溢れた。



写真4 国吉祭2019鯉が窪会場写真

#### アンケート・ヒアリング結果・分析

参加者は岡山市や鳥取県からの来客者もいたが、95%が新見市の方で、そのほとんどが地域住民だった。

「国吉康雄を知らなかった」が85%という結果から、国吉祭を通して国吉康雄を伝えることができたと考えられる。

「岡山県は伊勢神宮のある三重の次に、金沢のある石川より国宝・重要文化財が多いと知っていたか？」という設問では、岡山県が石川県より多いことを知る人はアンケートではいなかった。

「ここ一年で、美術展覧会やコンサートや演劇、映画、講演会など、文化イベントにどれくらい行かれましたか？」には、90%以上が2回以上参加していた。参加場所は、新見市内や、岡山市や瀬戸内地域よりも、広島や福山が多い傾向にある。

「岡山県や新見市で、文化を親しむ市民を増やすために必要な文化政策はどんなものでしょうか？」では、次項③のアンケートでも多かった「専門性を持った」大きなイベントの誘致をあげている人が多く、地域資源の活用した国吉祭に可能性を感じる声も寄せられた。

#### ③ コラボ型国吉祭

国吉祭2019×Jホールレインボーコンサート 音楽と辿る国吉康雄の旅路

開催日：2019年10月14日

会場：本学鹿田キャンパス Junko Fukutake Hall

料金：500円 参加者：350名

国吉康雄が「近代」の流行や時代の潮流を敏感に捉え、作風を変化させ続けた<sup>28</sup>理由を、当時の音楽表現の移り変わりと共に考察しようと考案され、本講座と岡山フィルハーモニック管弦楽団の運営を担う、(公財)岡山シンフォニーホール共同企画として開催した。この企画は「芸術ジャンルを超えたコラボレーションイベントを開催したい」という岡山シンフォニーホール高次秀明専務理事の依頼から始まる。興味・関心の対象がアート、音楽、講演と様々

な市民が、新しい発見と交流の場となるコンセプトが設定され、「国吉祭2019×Jホールレインボーコンサート 音楽と辿る 国吉康雄の旅路」を前述の創作音楽舞台劇「老いた道化の肖像といくつかの懸念」を企画・運営に続き、芸術表現と学問領域のジャンルを横断する学際的な取り組みとなった。

企画と運営に当たった、2019年度のCD養成受講生は、4月に開催したエース展で、「国吉モデル」を体験し、国吉康雄理解とクリエイティビティのトレーニングが行い、前年度の受講生も参加し、経験の共有、課題の引き継ぎも行われた。テーマも「近代」の芸術史に設定し、これについてエース展の資料を中心に読み込みを実施。6月から企画会議を重ね、本イベントの広報計画や、運営体制を検討。会場運営を受講生で行った。

#### アンケート・ヒアリング結果の分析

「感想」では「面白かった」が全体の50%を占め、ついで「勉強になった」が20%であった。「参加動機」は、「国吉関連のイベントだから」が44%で、「クラシック音楽が好き」の51%の次に多い結果となった。この「参加動機」の結果から、本イベントが、目的の通り、「アート」と「音楽」のどちらのファンも取り込んだことが証明された。

「これまで参加したことのある国吉関連のイベントはあるか？」は、2016年から2019年まで幅広く、リピート率の高さが窺え、国吉祭、及び国吉関連イベントにおいて、一定のファン層の獲得に成功したと考えられる。

「参加年齢」では、全世代の参加があったが、このうち10代と20代が全体の30%を占めた。これは、岡山大学内での告知活動の成果が現れたこと、夏休み前から継続して行った岡山市内でのチラシの配布とSNSの投稿が影響を与えたと推察できる。

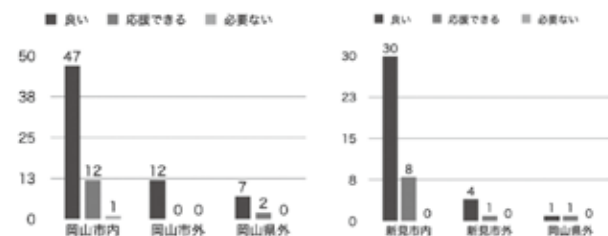


図6 「学生が地域に出て、文化活動を行うことをどう思うか？」左本イベント。右鯉が窪での国吉祭

#### 演奏曲目と対比した国吉作品

演奏した曲目は、国吉康雄が在米中に流行した作品など13曲。演奏会の前には、諸田大輔准教授（教育学研究科）による講演「国吉康雄が影響を受けた印象主義と近代アメリカの音楽とアート」と演奏も

行われ、演奏の間には国吉作品と演奏曲目との関係性や作曲の背景についての解説が行われた。

- No.1 主題：国吉が求めたアメリカを形作ったものの「愛国心」と「理想」/ルイス・モロー・ゴットシャルク『ザ・ユニオン—国民歌に基づくコンサート用パラフレーズ』/国吉作品：《自画像》1918
- No.2 主題：国吉が誕生した1889年・洋の東西が交流する/クロード・ドビュッシー『Tarentelle styrienne (Danse)』/国吉作品：《野性の馬》1921
- No.3 主題：国吉が描いたフランス・黄金と喩えられる時代/ジャック・オフエンバック『地獄のギャロップ(天国と地獄)』/国吉作品：《バンダナをつけた女》1936
- No.4 主題：真のアメリカを表現するために・アメリカに暮らす誰もが求めたもの/アントニン・ドヴォルザーク 弦楽四重奏曲第12番『アメリカ』/国吉作品：《二人の赤ん坊》1923
- No.5 主題：アメリカによるアメリカのための音楽/ジョージ・ガーシュイン『ラプソディー・イン・ブルー』（短縮版）/国吉作品：《水難救助員》1924
- No.6 主題：幼い時の記憶・日本への思い/備前岡山獅子舞太鼓唄『こちゃえ節』/国吉作品：《日本の張子の虎とがらくた》1932
- No.7 主題：軍靴に追われ・「退廃」というレッテルを貼られての亡命/アルノルト・シェーンベルク『浄夜』
- No.8 同『皇帝円舞曲』（ヨハン・シュトラウス作曲・シェーンベルク編曲）/国吉作品：《安眠を妨げる夢》1948
- No.9 主題：祭りは終わった・故国と育ての国の戦争/アーロン・コーブランド『市民のためのファンファーレ』/国吉作品：《ここは私の遊び場》1947
- No.10 主題：アメリカが悲しむ時/サミュエル・バーバー『アニウス・デイ (Agnus Dei)』国吉作品：《鯉のぼり》1950
- No.11 国吉が愛した歌曲/ステイブン・フォスター『Jeanie with the Light Brown Hair』/国吉作品：《恋人たちの道》1946
- No.12 主題：パリを経ての革命～誰一人として存在しないこと/アストル・ピアソラ『来るべきもの (Lo que vendra)』/国吉作品：《通りの向こう側》1951
- No.13 主題：国吉と同じ歳の喜劇王の手によるスコア/チャールズ・チャップリン『ライムラ

イト/テリーのテーマ』/国吉作品:《ミスター・エース》1952

#### ④ 新しいスタイルでの「国吉祭」の実施

##### 国吉祭2020 On-line Studies

開催日:2020年11月7日・11月8日

会場:岡山大学津島キャンパス「創立五十周年記念館」特設スタジオ

閲覧者数:Vimeo 564回/ホームページアクセス数(動画視聴埋め込み)1136回

アクセス地域:国内(1都2府17県):海外(2ヶ国)

##### ④-1 国吉祭のオンライン実施

2020年度は新型コロナウイルス対策のため、オンラインで同手法を行うべく、システムを構築し、「国吉祭2020」を実施した。

システム構築をするにあたり、2020年4月から9月にかけて、本講座で担当する6講義全て(12学部1研究科229名)で、既存のアプリケーション(Zoom, miro, Line等)を組み合わせた形でオンライン講義を実施した。上記期間の講義事例は以下である。

(ア) Zoomを使用した全体講義(外部カメラと映像キャプチャーまたはスイッチャーを使用)方法:講義中に学生からチャットを受け取り、匿名で発表。挙手機能を使った会話。ポイント:教室内の液晶を外部カメラで映しプレゼン画面を発信することで、情報の蛇口がZoomに統一され、通信量が圧縮、受信側の負荷が軽減される。

(イ) ZoomとLineを使った「ロジカルペインティング」方法:①事前にLineでグループAとBを作成。②ZoomのブレイクアウトルームでAとBが2名でペアになるように分ける③LineグループAに画像を送り、画像についてAがBに言葉のみで説明する。ポイント:オンラインでコミュニケーションを取る練習と、学生間の考えの多様性を確認。

(ウ) Zoomとmiroの「グループワーク」

方法:Zoomのブレイクアウトルームでチームを分け、miroと併用しグループワークを行う。ポイント:miroのホワイトボードは、講師が全て閲覧・管理可能。付箋や画像貼り付けなど、使用可能なツールが多彩なので、学生はZoomとmiroの組み合わせで、対面に近い状態で対話可能。

講義後に取ったアンケートの集計(n=189,設問は一部抜粋)

(ア) 講義の満足度:92%(満足とやや満足の合計)

(イ) 双方向の講義が必要:57.6%/対面よりもチャッ

トの方が発言しやすい:68.2%

(ウ) オンライン講義に投資した金額 0円:63.4% / ~3000円:22.6% / ~10,000円:5.8% / ~20,000円:6%

(エ) オンライン講義の準備に要した時間 6時間:75.6% /12時間:13.2% / 1日:3.6% / 2日以上:6.4%

(オ) オンライン講義で聞き取ることができた:69.6% /聞き取りづらかった:30.2%聞き取ることができ:講義①1Q→2Q:63%→74% / 講義②1Q→2Q:50%→69%

(カ) コメント(一部抜粋)1番人の温かさを感じた授業/オンラインとは思えないほど先生方とコミュニケーションが取れた/今まで受けたオンライン講義の中で最も良い/ホワイトボードを使用することで、深い意見を発掘することができた。

講義ではまず、受講生に通信環境やwi-fiの仕組み、オンライン講義中のトラブルシューティングを繰り返し説明した。こうした講義と準備を徹底することで「国吉祭2020 On-line Studies」を開催した。

プログラムでは、本講座が反転講義用(学生の事前予習のために制作した映像資料)や、国吉康雄の絵画の紹介映像作品、ハンセン病患者強制隔離問題、豊島での産業廃棄物不法投棄事件について、それぞれの専門家が解説した映像ツアーを配信。これらに加え、本講座が提供するCD養成受講生が企画した新規映像作品などを2日間配信した。

この配信にあたって、「国吉モデル」に従って、アートや文化の保存、地域やSDGsに関する対話と探究を促すライブ配信プログラムも多数実施。コロナ禍においても、岡山や瀬戸内の豊かな文化芸術資源と抱える社会課題の一旦を知ることができるよう、通信環境、使用パソコン等で生じる視聴格差が広がらないよう、低通信量で配信ができるシステムでの配信を心がけた。

配信するオンラインシステムは、オンライン講義で開発したシステムに加え、映像の権利を守るため、全てのプログラムでダウンロードを禁止。著作権を守るために有料アプリケーション「Vimeo」でライブ配信を実施した。制作期間中は、感染症対策を徹底し、基本的な打ち合わせはオンラインで行い、10月以降の対面での制作の際には、スタッフ全員がPCR検査(民間)実施した。

視聴地域とアクセス数の広がり、対面イベントとは違う可能性が示されたとも考える。コロナ後の岡山への訪問希望や問い合わせが県外から多く寄せられ、県の文化資源のアピールや、学生、市民の学

習の場としてのオンラインプログラムの活用が提案できると考えるためである。

一方でその手法に関しては課題が見つかった。運営スタッフの育成を学生の教育の場として機能させるためには、オンラインと対面でのトレーニングメニューを有効的に組み合わせることが重要であることが確認された。

#### ④-2 配信プログラム一覧

- No.1 国吉康雄記念研究寄付講座とプログラム紹介（これまでの活動総括）
- No.2 コロナ禍で考えるSDGs～岡山市「保健福祉を中心に」と萩原工業「リサイクル」への取り組み
- No.3 吹屋「花めぐり」という模索（吹屋で実施される地域イベントの考察）
- No.4 コロナと生きる大学生 岡山大学新入生の考察（CD養成受講生制作のドキュメンタリー）
- No.5 ハンセン病強制隔離問題を考える～国立療養所長島愛生園オンラインツアー（愛生園でのツアーを収録）
- No.6 最悪の産業廃棄物不法投棄「豊島事件」を知るオンラインツアー（豊島での事件の解説ツアーを収録）
- No.7 折りの画家・清志初男の芸術
- No.8 本を読むように絵画を読む「国吉康雄 ミスターエース」（国吉モデルの実践）
- No.9 国立療養所大島青松園ジオラマプロジェクトの紹介
- No.10 大島での講義から愛生園へ（ハンセン病強制隔離をテーマに設定）
- No.11 朗読「入所児童の手記」（長島愛生園歴史館資料を岡山大学演劇部が朗読）
- No.12 岡山大学名誉教授が語る昆虫の世界「鳴く虫のお話」
- No.13 岡山でSDGsを考える 岡山市の描く保健福祉（岡山市担当職員への取材）
- No.14 文化の保存に関すること～熊本震災被災地での活動から
- No.15 映像配信の可能性「Blackmagic Design 社との対話」（映像・編集機器と配信システムの分野で革新的なアイデアを提案するBlackmagic Design社の技術担当者との対話）
- No.16 岡山でSDGsを考える 萩原工業が示すリサイクル社会
- No.17 国吉康雄を知っていますか？ 国吉型・対話探究鑑賞法という提案
- No.18 国吉康雄の「アート×歴史」を題材としたプ

ロジェクト 岡山大学大学院生のアプローチ  
No.19 瀬戸内の景色となること・ベネッセアートサイト直島の挑戦

No.20 進め!! クリエイティブゲーム振興会 ゲーム制作を通して学ぶ物語の作法

No.21 教会で奏でるドビュッシー完全版（諸田大輔准教授が指導する学生とのコラボレーションによる音楽演奏会を、岡山市ルーテル岡山教会で収録）

#### ⑤ 発展的な活動

##### ⑤-1 シンポジウム「岡山から文化芸術資源の保存について考える」

開催日：2018年10月26日 会場：本学鹿田キャンパス Junko Fukutake Hall

岡山は古代吉備の遺産を伝える遺構が多くあり、世界的な絵画コレクションで知られる大原美術館を中心に賑わう倉敷美観地区や、瀬戸内のアートプロジェクトであるベネッセアートサイト直島への玄関口としても知られる。「岡山県は歴史と文化あふれる地域です」と、岡山県作成の観光サイトに記載されている通り、岡山県には170点（2021年4月現在）の国宝・重要文化財があり、これは伊勢神宮を有する三重県に次ぐ規模で、文化によって都市・地域プロデュースを行なっている石川県を超える数である。

岡山市北区にはわが国を代表する武家庭園「後楽園」周辺に文化施設が集中し、質と量、そしてコンパクトさで際立つ文化地区となっている。しかし、平成30年7月豪雨の被害を目の当たりにし、私たちの国土がその歴史上、多くの災害に見舞われてきた「災害発生地域」であることを再認識することになった。これは、私たちの歴史や暮らしの拠り所となる文化財や芸術作品が、あまりに脆い「宝物」であることを示すものでもある。有形無形を問わず、これらの保存は不断の努力を怠った途端、消えてしまう危ういものでもあるからだ。

政府が示す「文化芸術推進基本計画<sup>29)</sup>」の前文でも、「我が国の文化芸術資源は、保存技術や材料の確保、伝承者の育成等を含め、長い歴史を通じて各地域の先達の地道な努力により今に受け継がれてきた価値あるものであり、世界に誇るべきものである。これを維持、継承、発展させることはもとより、日本人自身がその価値を十分に認識する必要がある」とする一方で、2015年に岡山市が実施した調査で、アンケートに回答した市民の多くが文化芸術資源の生活への「よい影響」を認識しながら、その半数が「文化施設を利用しない」とも回答する。残念ながら、本講座で主催する講義、イベント等で実施した学生、市民へのアンケートからも、岡山市内北区が日本有



数の文化芸術資源を有し、文化施設の集中地区という認識は薄いと考えられる。しかし、私たちの暮らす地域には、故あって、今現在、非常に多くの価値ある文化芸術資源を、先人たちから預かっている状態にある。そこで懸念されるのは、有事の際、貴重な人類の遺産である文化芸術資源の損失を招きかねないということである。私たちは多くの文化芸術資源を、この時代にこの地域で「預かっている者」として、この宝の適正な保存と、その根拠となる研究を積極的に進めなければならない。このためにまず、地域の文化芸術資源の価値を地域に発信する取り組みを行うべく企画されたのが、シンポジウム『岡山から文化芸術資源の保存について考える』である。シンポジウムの内容

本シンポジウムでは、平成30年7月豪雨の被災地で、古文書や書画、個人宛の手紙、写真まで、幅広く「記憶と記録」に関わるレスキュー作業を行なっている『岡山史料ネット』の活動報告と、岡山大学の今津勝紀教授が行ってきた被災前の基礎調査がこの活動にどれだけ有益だったかを。そして、東北、熊本などの被災地へ赴き、罹災作品のレスキュー経験のある、絵画保存修復家の岩井希久子氏。ニューヨークで歴史的建築物の外装・彫刻の修復などを行ない、第二次世界大戦中、ナチスドイツの大量虐殺の犠牲となったユダヤ人のためのメモリアルなどの制作を行なってきた彫刻家の吉野美奈子氏を招いての対話と総合討議に加え、平成30年7月豪雨の水害の過程、地域学習と防災教育などの研究を行っている岡山大学大学院教育学研究科の松多信尚教授の岡山での災害についての報告などにより、地域の文化芸術資源を後世に伝える意義について考察した。

#### プログラム

進行・対談：才士真司

- (1) 開会の挨拶 挨拶文 岡山大学長 榎野博史氏
- (2) 緊急報告「地域の記憶と災害－今回の西日本豪雨と岡山史料ネットの活動より－」登壇者/今津勝紀（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
- (3) クロストーク「熊本震災～九州のバルビゾン・御船町で何が起こったか」登壇者/岩井希久子（絵画保存修復家）
- (4) 講演「自然災害とは何かを考える－減災へ向けて、地域を知ることの重要性－」登壇者/松多信尚（岡山大学大学院教育学研究科教授）
- (5) クロストーク「NY～9.11からの都市の再生を目の当たりにして」登壇者/吉野美奈子（芸術家・彫刻修復家）
- (6) 総合討議「岡山・瀬戸内での文化芸術資源の

現状を踏まえ」

#### ⑤－2 碧と祈る 画家・清志初男遺作展

会期：2020年11月21日～12月6日 会場：山陽新聞社さん太ギャラリー・本学附属中央図書館2階・長島愛生園本館1階ギャラリー 会場入場者：352人

配信動画視聴者（90分）：250回

展覧会予告編動画（90秒）：再生数4194回

国吉康雄が一度だけの帰国を果たした1930（昭和6）年に、国立として初めて設立された「国立療養所長島愛生園」で、72年間暮らし、画業に打ち込んだ洋画家・清志初男の遺作展覧会を、長島愛生園歴史館の協力で行った。長島愛生園歴史館と連携し、展覧会を開催した。

会場内では、検温、アルコール消毒、不織布マスクの配布、問診票の記入など、感染対策を徹底したが、移動の自粛が求められているなかでの展覧会の開催でもあったため、会場に来ることができない方のため、特別映像を制作し、清志初男展特設ホームページやフェイスブック、YouTubeなどから、会場内の作品の様子と併せて配信した。

本展の目的は、清志の認知度を高めることと、清志に関する情報を集めるためである。アンケートでは「初めてご覧になった方」と「清志氏をご存知の方」という2種類を作成した。

国内では無名と言ってもよい画家の展覧会で、さらに感染が蔓延している中での開催であったが、SNSでの宣伝と山陽新聞への掲載、OHKのテレビ放送、RSKのラジオ放送の効果もあり、清志作品での展覧会企画の実施の可能性を感じ、成功だったといえる。

また、会期中に実施したライブ配信（90分）には、250回の視聴があり、展覧会用に制作した動画の予告編（90秒）は4200回の視聴があった。

今回、このプログラムの実施にあたり、文部科学省所管の独立行政法人日本芸術文化振興会が行う令和2年度「文化芸術活動の継続支援事業」の支援もあり、開催することが可能になった。

#### ⑤－3 受講生の応用

CD養成内で、「アートを活用した教育プログラム」を募集し、企画者がプレゼンの上、二つの開発事業を決定。2020年度は（公財）福武教育文化振興財団の助成採択を受け、二つの事業を開発し、2021年度の実施に向けて準備中である。

ゲームを活用したイベントで、若者が生き生きとした地域社会を！

SNSをコミュニケーションツールとして多用する若者の「短文での会話文化」に一石を投じるため

に企画された。大学入試改革により従来の「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」そして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」といった要素が重要となっている。こうした要素を含む学習機会を中高生に提供するため、テーブル・ロールプレイング・ゲーム（TRPG）を通して、「物語の作法」を学ぶ学習プログラムを開発中である。課題解決を図る際の「取材力」「物語性の創造」と「独自の語り口の獲得」を目的にTRPGを活用した教育イベント企画。2021年度中の実施を目指している。また、「物語性」を学ぶことに特化させた事業を別プロジェクトとして始動させ、岡山市の「令和3年度学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクトソーシャルビジネスチャレンジ」に採択された。アートと歴史で小学生の自己理解を深めるプロジェクト

小学生から成人まで、幅広い世代を対象に、オンライン型の絵画鑑賞と歴史教育を組み合わせたワークショップを実施する取り組みで、国吉康雄の絵画作品を使用し、2度の世界大戦をアメリカで過ごした国吉の人生について探究することを試みる。ワークショップの参加者は、自身や他の参加者の考え方・価値観を知り、自己理解を深める第一歩となることを目的とする。

当初は対面での実施を予定していたが、感染症対策の観点からオンライン教材の開発にシフト。「岡山自主夜間中学校」の協力を得て、本学学生、院生と共に、映像による解説動画を制作。留学生1名を含む10～80代の8名で検証会を実施。2021年度秋の本格運用を目指し、準備を進めている。

#### ⑤ー4 国吉康雄記念研究寄付講座制作映像・配信プログラム

本講座ではこれまで、国吉康雄を始め、地域文化資源を取材するにあたり、写真や文字情報だけではなく、可能な範囲で映像記録を残すことを心がけ、映像作品として展覧会や国吉祭で公開している。どの地域にも、地域特有の文化芸術資源は存在するが、この資源認定には、文化的、芸術的な価値に加え、地域との関連性が高いことが、歴史的、かつ研究面で証明されている必要がある。しかし、認定、研究、保存には、労力とコストが必要となり、それが地方行政や個人の熱意やボランティアで活動する団体の運営を逼迫する。本講座では、後進の研究者がアクセス可能なアーカイブとして、本講座の活動を、映像資料や作品として残している。

また、世界を席卷する新型コロナウイルスの蔓延を受け、受講生が現地に赴き取材や研究活動を実施することは困難な状況となった。本講座では、学生

の学びや文化芸術資源を知る機会の提供として、2020年下期から、映像制作を積極的に行った。

制作した映像作品は、展覧会・国吉祭会場、オンライン上で公開してきた。以下は、「国吉祭2020」で配信しなかった作品。

国吉康雄検証ドキュメンタリー映画「国吉を誤解している日本・忘れたアメリカ」

国吉康雄の指導を受けたブルース・ドーフマン（1936-）や、国吉康雄研究の第一人者であるバード大学のトム・ウルフ、ニューヨーク市立大学講師の山村みどり、芸術家・彫刻修復の吉野美奈子などに行った8時間のインタビュー素材を1時間にまとめ、最新の国吉像に迫る映像作品化。

その他、映像配信の可能性を探るプロジェクトとして、「ニューヨーク近代美術館研究員との対話」を実施。ニューヨークと岡山大学を結び、ニューヨーク近代美術館研究員でニューヨーク市立大学講師の山村みどり氏と本講座の才士による、「近代アメリカ美術の動向」に関する集中講義の様子を社会人にも公開し、配信した。

映像制作に関して、2021年度への継続案件として以下がある。

#### 和歌山県立近代美術館での取材記録

2017年に「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」を開催した和歌山県立近代美術館の奥村一郎学芸員にインタビューを行い、石垣栄太郎の作品を鑑賞する映像を制作している。一方的な石垣の作品解説動画ではなく、国吉康雄作品を対象に岡山県立美術館作品で制作した「本を読むように絵画を読む」の石垣栄太郎バージョンの制作を予定している。

#### 4. 成果と今後

本講座の第2期の活動は学内外で高い評価を受けている。

2019年、岡山県から「岡山の地域文化芸術資源として『国吉康雄研究・顕彰活動』のブランディング」を評価され、「第20回岡山芸術文化賞準グランプリ」を受賞。

岡山市からは「国吉型・対話探究型モデルを開発し、新たな教育プログラムとして外部の文化団体と協働しながら実践している。」ことを評価され、第47回岡山市文化奨励賞を受賞した。

また、企業メセナ協議会が毎年認定している「メセナ活動」に、2019年から今年度に至るまで連続して活動が認定された。

研究面では、独立行政法人日本学術振興会が行っている科学研究費助成事業内の「基盤研究C」に、

2020年～2022年の3ヵ年計画で採択され、これを機に対象を国吉康雄作品以外にも広げて実施されることとなった。現在、以下の3つのプロジェクトで実践を進めている。

- A. 「震災記憶と地域文化資源の継承」を試みるために、平成28年熊本地震で被災し、修復活動を被災地域（熊本県御船町、熊本市）住民が主体となって継続している油彩画作品を対象に実施。
- B. ハンセン病隔離制作と感染症への理解を深めるため、国立療養所長島愛生園で、元ハンセン病患者が制作したアート、工芸作品で運用。
- C. 近代化とその影響がアート施設の設置背景にある、香川県直島、豊島などのアート作品と周辺施設を対象として実施。

A.～C.のプロジェクトで、それぞれのアート作品と、その制作背景にある社会課題への探究的な思考を促す機会を創出し、アフターコロナを見据えた、新たな教育プログラムの開発を行う予定である。

ここまでに見てきた、国吉康雄をはじめとした作品や研究資料の「運用」が目指すものは、大学と地域との協働プロジェクトとしての「文化芸術資源」の「コンテンツ化」にある。コンテンツという響きには、文化の「商品化」であるかのようなイメージがあるが、本講座が模索するのは地域市民に開かれたシステムで運用可能な、地域資源の価値向上のための「コンテンツ化」である。

本講座では、このシステムを恒久的に。かつ、災害発生時などの非常時にも安定的に維持させるための検証活動を行ってきた。この結果、現在までに得られた結論は、「地域の理解を得るための不断の努力が必要」であるということである。

「地域の文化財」を認定するシステムは、大抵の場合、シンプルに「歴史的な○○」であるためや、もっと曖昧な「地域の宝だから」という「伝承」や、地域からの「申請」が、権威によって証明されるという手法を取る。こうした手続きによって認定された文化財は、現在の多様な価値を尊重する社会規範や、情報や様々な文化コンテンツが流通する社会においては、地域に浸透し難く、告知も十分に行われない。このため、地域の大多数の市民の認知が進まないなかで、公的な予算の投入や、地域の人的・資金面での協力を要する文化財の保全に理解は得られるだろうかという「問い」が、本講座の活動のなかで生じた。

本講座が、様々な活動を通して確信するのは、地域の文化芸術資源の存在を多くの市民が共有することの必要性である。その手法として、新たな価値を

創出し、還元することが必要であるのだが、観光資源化などの価値判断は、商材としての成立の可否によって計られることになる。むしろ、教育分野や福祉分野での「地域サービス」としての供給や、地域の交流を促す分野での活用を積極的に促進することで、地域オリジナルの文化資源の価値の再定義、創出の必要がある。また、これらへの文化芸術資源の転用は、アイデアや思いつきだけで行うべきではなく、研究やコレクションの基盤を維持しながらの努力や、地域内での役割の分担などが必要となることも強調したい。

この検証と模索のため、国吉康雄という、地域の文化芸術資源をサンプルに、岡山の「文化力」を素材として、岡山の「地域力」に、地域の基幹大学の「研究・企画・発信」する力を縫い合わせた、岡山発信の新たな芸術・文化プロジェクトの組成を試みているのが、本講座の活動である。

## 5. 協働先一覧（五十音順）

共同企画 宇城市不知火美術館／熊本県立美術館／瀬戸内市立美術館／栃木県立美術館

共同企画（連携事業パートナー）

IWAI ART 保存修復研究所／宇城市教育委員会／ベネッセアートサイト直島／ヤマトグローバルロジスティクス株式会社

共同企画（教育事業パートナー） 岡山トヨタ自動車株式会社／公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団

共同企画（コーディネート） 田邊典子（陶芸家／（株）吹屋 ディレクター）

共催 NPO きらめき広場／岡山県／おかやま県民文化祭実行委員会／公益財団法人岡山シンフォニーホール／公益財団法人福武財団／公益社団法人岡山県文化連盟／国立療養所長島愛生園／哲西公民館／長島愛生園歴史館新見市立哲西図書館／文化がまちにある！プログラムin備前実行委員会

助成 岡山県みんなの文化活動応援事業／公益財団法人福武教育文化振興財団／独立行政法人日本芸術文化振興会 令和2年度「文化芸術活動の継続支援事業」

特別協力 出石国吉康雄勉強会／一般社団法人アートネットワーク熊本みふね／岡山市市民協働局SDGs・ESD推進課／岡山シティミュージアム／岡山大学学務企画課教育支援グループ／岡山大学工学部創造工作センター／岡山大学Junko Fukutake Hall／岡山大学創立五十周年記念館／岡山大学附属図書館中央図書館／株式会社協同プレス／株式会社山陽新聞／株式会社中国銀行／株式会社内外プロセス／株式

会社直島文化村/株式会社ベネッセホールディングス/研精堂印刷株式会社/国立療養所大島青松園/国立療養所大島青松園入所者自治会/西日本旅客鉄道株式会社/日本福音ルーテル教会岡山教会/廃棄物対策豊島住民会議/萩原工業株式会社/ブラックマジックデザイン株式会社

制作協力 出石国吉康雄勉強会/NHK/岡山県立大学/岡山商工会議所/株式会社オフィス天野

展示作品・資料協力 井原市文化財センター「古代まほろば館」/岡山市立中央図書館/岡山県立美術館/画廊喫茶くる実

研究・資料協力 アートベース百島/Tom Wolf(Bard College)/井原市田中美術館/小澤律子(旧国吉康雄美術館)/笠岡市竹喬美術館/公益財団法人大原美術館/横尾忠則現代美術館/Yasuda Fine Arts Inc./山村みどり(ニューヨーク近代美術館研究員)

制作 岡山大学教養教育科目「クリエイティブ・ディレクター養成」受講生/「岡山のクリエイティブセクターの活性化を図る」自主ゼミナール

後援 朝日新聞宇都宮総局/朝日新聞岡山総局/RSK山陽放送/RNC西日本放送/NHK宇都宮放送局/エフエム岡山/エフエムくらしき/エフエム栃木/OHK岡山放送/岡山県教育委員会/岡山県郷土文化財団/

岡山市/岡山市教育委員会/Oniビジョン/KSB瀬戸内海放送/産経新聞社宇都宮支局/産経新聞社岡山支局/下野新聞社/高梁市教育委員会/高梁市成羽町観光協会吹屋支部/玉野市/玉野市教育委員会/TSCテレビせとうち/東京新聞宇都宮支局/とちぎテレビ/栃木放送/新見市教育委員会/日本経済新聞社宇都宮支局/毎日新聞社宇都宮支局/毎日新聞社岡山支局/読売新聞宇都宮支局読売新聞岡山支局/レディオモモ

監修協力(国吉祭2019 CARAVAN in 鯉が窪) 岡山大学大学院教育学研究科/石川彰彦教授(有機化学研究室)/稲田佳彦教授(理科教育講座)/河田哲典教授(家政教育講座)/松田和子教授(芸術教育系)協力 ART×AREA×CUTE/岡山県立高梁城南高等学校 美術部/岡山大学 総務・企画部広報・情報戦略室/岡山大学埋蔵文化財調査研究センター/株式会社ビッグジョン/後楽ホテル/米粉パンの店こめ工房/セントラルホテル岡山/玉野ショッピングモールメルカ/特定非営利活動法人瀬戸内こえびネットワーク/長尾醬油店/ホテルヴィアイン岡山/ホテルグランヴィア岡山/ホテルマイラ/みるを楽しむ!アートナビ岡山

全事業制作 (一社)クニヨシパートナーズ

- <sup>1</sup> 1889年岡山市北区出石町に生まれ、1906年単身渡米。アジア系移民として終生アメリカの市民権を得られず過ごすが、アメリカを代表する洋画家であり、社会活動家、教育者としての側面も持つ。1953年アメリカで死去。近年、保守化と分断が進むアメリカで再評価されている。
- <sup>2</sup> 作品点数は油彩など、所謂「一点もの」の作品だけで、63点(2019年1月現在)にもなり、デッサンや版画などは600点に近い。これらを所蔵する団体も、岡山県立美術館、大原美術館、竹久夢二郷土美術館、中国銀行、山陽放送など、岡山を代表する施設、団体がある。
- <sup>3</sup> (公財)福武教育文化振興財団と(公財)福武財団、(株)ベネッセホールディングス
- <sup>4</sup> 瀬戸内国際芸術祭2019の一環として、2013年3月20日-6月9日に直島にあるベネッセハウスミュージアムで開催。20,000人が入場。
- <sup>5</sup> 才士による出石町住民に対する聞き取り調査や、国吉康雄の作品を鑑賞し、自由に対話を重ね、意見交換が行う出石国吉康雄勉強会、勉強した成果を発表する「国吉祭」を行った。
- <sup>6</sup> 国吉康雄コレクションの中でも福武財団が管理する「福武コレクション」は、作品・資料約700点で構成され、世界最大規模の国吉コレクションで

ある。

- <sup>7</sup> アメリカの国立美術館、スミソニアン・アメリカン・アートミュージアムで、2015年4月2日~8月29日の期間で開催。400万人を動員した国吉没後最大の回顧展。
- <sup>8</sup> 肉を包むブッチャーペーパーに、水・アラビアゴム・蜜などで溶解した不透明な水彩絵具で描かれた。国吉が賞賛とバッシングの渦中の頃に、強制収容された日系人へのチャリティーイベントで描かれた。
- <sup>9</sup> 絵画保存修復家の岩井希久子が修復を担当した。
- <sup>10</sup> 2016年6月3日~7月10日に横浜そごう美術館で開催。18,871人が入場。
- <sup>11</sup> 2017年10月7日~12月24日に和歌山県立近代美術館で開催。4,279人が入場。
- <sup>12</sup> 「2.3 国吉祭 国吉祭とは何か」参照
- <sup>13</sup> WAFUNIFは国連本部内に拠点を置き、1978年に国連憲章第71条に準拠して設立された国連直属のNGO。国連組織でインターン、研修生を務めた人材で構成される。国連や国連組織への就職・インターン派遣の窓口となり、国連の各組織を活性化すること理念とする。
- <sup>14</sup> 「国吉祭2016」から昨年の「国吉祭2020 オンラインスタディーズ」まですべてを、岡山県との共催



事業として開催している。この支援は、出石町で2013年より開始された「国吉祭2013」から一貫して実施されている。

<sup>15</sup> 才士真司「瀬戸内のアート運動と国吉康雄の結節点」,『岡山大学教育学部研究集録』第170号,2019年,pp.15-39

<sup>16</sup> (一社)アートネットワーク熊本を中心に展開される「熊本地震 田中憲一作品修復プロジェクト」

<sup>17</sup> 才士真司「国吉康雄が受けた日本の伝統的美術教育と今後の国吉康雄研究への影響について」,『岡山大学教育学部研究集録』第171号,2019年,pp.55-61.

<sup>18</sup> (株)ベネッセコーポレーションの企業メセナの一環として1990年,南方ビル竣工を機に,同ビル二階に開設され,一般公開を始まった。

<sup>19</sup> Visual Thinking Strategyの略で,1980年代に心理学者のアビゲイル・ハウゼンとニューヨーク近代美術館によって開発された鑑賞法。

<sup>20</sup> Tom Wolf『The Artistic Journey of Yasuo Kuniyoshi』Smithsonian American Art Museum,2015年4月10日

<sup>21</sup> 和歌山県立近代美術館でのアンケート結果より。「展覧会において,国吉を非国民だとする投稿があった」

<sup>22</sup> 諏訪敦「国吉康雄作品:模写プロジェクト2014」,『広島市立大学芸術学部芸術学研究科紀要』第21号,2018年,pp.104-113

<sup>23</sup> 脚注15参照

<sup>24</sup> 脚注17参照

<sup>25</sup> 国吉康雄が生まれた岡山市北区出石町で2012年から毎月実施されている国吉康雄に関する勉強会。出石町の住民から依頼され,才士真司が初め,講師を務めている。コロナ禍の現在は休止中。

<sup>26</sup> 鼎談「祖国・日本・敵国」:2018年6月9日14時~栃木県立美術館集会室

<sup>27</sup> ART iT美術と時評76:国吉康雄と清水登之 渡米画家の「ふたつの道」(前編)(後編)

<sup>28</sup> 国吉康雄の画業は,クロード・モネ(1840-1926)やポール・セザンヌ(1836-1906)の画風を意識した初期の作品に始まり,1920年代には,19世紀アメリカのフォークアートを思わせる作品に取り組み,アメリカの画壇にデビューした。1930年代に入ると,画風を転換し,ユニヴァーサルウーマンと呼ばれる女性像を描き,人気を博す。第二次世界大戦が始まると,制作と並行して,社会活動に精力を注ぎ,戦後は,再び画風を変化させ,多くの色を使った道化師の絵を描き,それまで描いてきた作品の集大成ともいえる大作を制作した。最晩年の1950年代には色を全く用いない黒インクによる作品へと変化し,1953年に没す。

<sup>29</sup> 文化芸術基本法の規定に基づき,政府は,文化芸術に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため,「文化芸術推進基本計画-文化芸術の「多様な価値」を活かして,未来をつくる-(第1期)」を策定しました(文化庁HP)